

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350304

研究課題名(和文) 小学校教師の保護者対応における変容プロセスと世代継承性に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Elementary-school Teachers' Process of Transition and Generativity in Interaction with Parents

研究代表者

植木 克美 (Ueki, Katsumi)

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70292068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)： 教職経験を重ねながら小学校教師が保護者への対応を変容させるプロセスとそこに影響を与える要因を検討しました。教師は中堅以降に児童と保護者が抱える課題の難しさに直面することで保護者への対応を変容させ、契機になったのが教師が視野を広げることでした。そこに関与するのが教師を支える関係です。教師を支える関係は、保護者が教師を支える関係と、教師同士で支え合う関係の2つがありました。現代は教師集団における年齢構成の不均衡や多忙化により教師たちの自然な学び合いが難しくなっています。教師たちの世代継承と自主的自発的な学び合いを支えるために保護者対応の経験交流を行うワークショップ型研修をデザインしました。

研究成果の概要(英文)： I studied the process by which elementary school teachers' interactions with parents transformed as they accumulated teaching experience, and the primary factors impacting this process. As they came face to face with the difficulty of the challenges faced by children and parents beginning in the middle stage of their careers, the ways in which teachers interacted with parents changed. This change was spurred by a broadening of the teachers' perspectives. The relationships supporting teachers were involved in this process. There were two types of such supporting relationships: those in which parents provided support for teachers and those in which other teachers provided the support. Today, it is becoming more difficult for teachers to learn from each other in natural ways due to imbalances in the age structure of the teacher population and to teachers' busy schedules. I designed a training workshop for exchanging experiences in interacting with parents.

研究分野：教育工学、教師教育

キーワード：保護者対応 ライフストーリー的手法 世代継承 教師教育 ワorkshop型研修 質的研究

1. 研究開始当初の背景

我が国の学校教育現場では保護者からの要望、相談等の対応に苦慮する声があがり教師の疲弊感が増しています。そして、子育てに困難を抱える家庭、保護者が増えています。

保護者対応は、対応策を講じることに加えて、教師の専門性の学習過程のスコープから検討することが必要と考えます。保護者へのかかわりを教師は教職経験を重ねていく中で、同僚教師に支えられながら身に付け資質を高めていきます。教師の専門性を授業経験から長期的な変容過程として扱った木原(2004)や藤澤(2004)の研究では、若手、中堅、ベテラン、あるいは前期、中期、後期という3つの期の授業力段階が示されているように、保護者対応についても長期的な視点から変容過程を検討する必要があります。

そこで、本研究では発達段階の特性から保護者とのかかわりが密になる小学校の熟年教師が語る保護者対応のふりかえり(省察)を通して、その変容過程を教職経験との関係から遡及的に明らかにします。秋田(2009)は、教師の専門性の学習過程は「省察と実践化の問題」として議論され、ある程度の期間を通して、様々な教師や教師たちの省察と談話、行為の関係を追うことが、これからの教師の学習過程において必要であるとしています。本研究に取り組むことで、保護者対応における教師の学習過程を教師の心理的経験から明らかにすることが可能になります。そして、保護者対応の学習過程サポートとして、異世代の教師たちの学び(generativity、世代継承)を支援するための研修をデザインします。

2. 研究の目的

本研究課題は、次の3点を目的とします。

(1) 熟年期(教職経験20年以上)の小学校教師にインタビュー調査を実施し、若手期(～教職経験10年目)、中堅期(教職経験11年目～20年目)、熟年期(教職経験21年目～)の3つの期の保護者対応が変容していくプロセスとその転機、要因について、事例研究を行いながら検討します。合わせて、現代の熟年教師が考える若手教師が保護者対応を行う際に必要となるコンピテンシーを検討します。

(2) 熟年期(教職経験20年以上)の小学校教師にインタビュー調査を実施し、保護者対応における小学校教師の変容プロセスを教職経験とそこに関与する要因の関係から検討し、長期的変容のプロセスモデルを生成します。

(3) (2)のプロセスモデルを活用して、異世代の教師間の自主的自発的な学び(generativity、世代継承)を支援する研修をデザイン、試行し、本研究の継続発展を試みます。これによって、現在、学校教師の年

齢構成の不均衡等の課題が生じている教育現場において、先輩教師から若手教師への世代継承を促進するとともに、中堅・熟年期教師をエンパワーメントし、「学び続ける教師」集団のコミュニティを組織することに結び付くと考えます。

3. 研究の方法

3つの研究目的に即して、次の方法をとります。

(1) 小学校熟年教師が語る保護者とのかかわりのふりかえり(省察)を通して、保護者対応について教師の長期的な変容を教職経験との関係から明らかにするために、事例研究を行います。事例は、いずれも熟年期にある通常学級・特別支援学級担任、管理職、養護教諭の事例をそれぞれ複数取り上げ、職務の内容による要因を含めて検討します。なお、比較対象群として若手期の小学校教師の事例を取り上げます。分析では、発話プロトコルから、3つの期に特徴的な調査協力者の具体的経験とふりかえり部分を抽出します。そして、分析の手続きは、木下(2003)のM-GTAを用い保護者面談のロールプレイにより得られた逐語録の分析を行っている上村・石隈(2007)の分析手順を参考にし、6つの分析ステップを構成します。

(2) 小学校に勤務する熟年期の現職教師約20名(理論的飽和化に至る人数とします)に、保護者対応についてインタビュー調査を実施します。そして、M-GTAにより分析を行い、保護者対応における小学校教師の長期的な変容プロセスモデルを形成します。

(3) 教師は互いに自分のライフ・ヒストリーを語り合うことで、互いの問題を解決できるとされます(Aspinwall, 1986)。そこで、本研究では保護者対応の変容プロセスモデルを活用し教師コミュニティにおける自主的自発的な世代間学習を支援できるワークショップ型研修を情動的サポート、情緒的サポート、エンパワーメント等の視点からデザインし、試行します。

4. 研究成果

4年間の研究期間を通して、学校教師に協力をいただき、次の研究成果を得ることができました。

(1) ①小学校教師が教職経験を重ねながら、保護者へのかかわりを変容させていくプロセスと転機、そこに関与する要因：

通常学級・特別支援学級担任、管理職、養護教諭のケースをそれぞれ複数取り上げ、合計で11ケースについて職務内容による要因を含めて検討しました。

第1に、教師が保護者への対応と認識を深化させるプロセスには、教師の成長を支える

重要な他者として保護者や同僚教師が登場すること、そして当事者の教師とこれらの他者の関係性に世代継承をよみとれました。世代継承には、(1) 教師と教師という専門家同士の間派生する世代継承と、(2) 教師と保護者という専門家と非専門家の間派生する世代継承、の2つのかたちがありました(図1参照)。教育には次世代を育成するという、教師特有の専門性があり、子育てにおける次世代の育成と共通性があります。だからこそ、年長の保護者が次世代の若手教師を支えるという関係が自然に形成される文脈を教育現場はもちます。なお、保護者対応の困難な経験が、保護者対応の変容をもたらす“転機”になっていると考えられました。

第2に教師を応援する保護者は減ったとされる近年においても、若手教師が年長の保護者によって支えられ成長していることを明らかにしました。そして、第3に加齢という教師の個人時間や、我が子をもち親になるといった教師の社会時間が保護者との関係を変化させることにつながるということがわかりました。

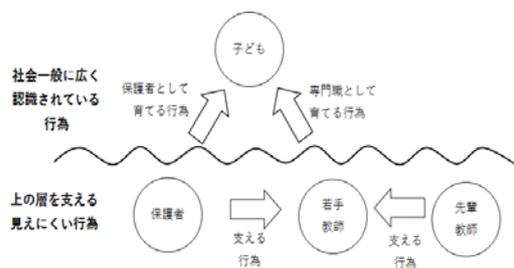


図1 若手教師を支える関係

②熟年教師が考える若手教師が保護者対応を行うときに必要とされるコンピテンシー(「見える能力」と「見えない能力」):

Spencer & Spencer (1993) の「コンピテンシーの氷山モデル」を踏まえて、保護者対応を行う際に必要な能力を、「見える能力」と「見えない能力(見えにくい能力)」に分けて、熟年教師へのインタビューから明らかにしました(図2参照)。

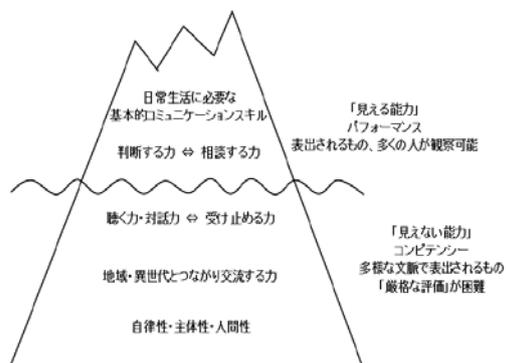


図2 若手教師の保護者対応に必要な力

熟年教師は、「見える能力」として日常生活に必要なコミュニケーションスキル、判断する力、相談する力を、そして、「見えない能力」として保護者の話を聴く力・対話力、受け止める力、地域・異世代とつながり交流する力、自律性・主体性・人間性を大切にしていることがわかりました。「見えない能力」は教職経験を重ねていく中で「見える能力」になり、熟年教師は自分の経験を伝えたり、自分のやり方を見てもらったり、あるいは若い教師の気づきを待つことで、若手教師の「見えない能力」を育てようとしていることがわかりました。

(2) 小学校教師が教職経験を重ねながら、保護者へのかかわりを変容させていくプロセスと教師を支える関係(世代継承):

(1)の事例研究の成果を踏まえて、熟年教師22名のインタビューデータをM-GTAにより分析し、保護者対応の変容プロセスと変容に関与する要因を検討しました(図3参照)。

熟年教師は若い頃、児童と保護者のもつ難しさに直面し、保護者対応の難しさを経験しますが、“若いなりのがんばり”を見せます。中堅以降になると、さらに児童と保護者のもつ複雑化した問題の難しさに直面する中で、視野の広がりや身に付け、我が子に一生懸命にかかわったり、逆に我が子に関心をもてない保護者の姿を目にします。これらの保護者が変わっていくことを見取ることで、一緒に児童を育てるパートナーとして保護者を認識するようになります。

このように、若い頃と中堅以降の違いは視野の広がりがありました。若い頃は児童と保護者のもつ難しさに直面すると、自分に何ができるかと不安と無力感をもち、申し訳なさを感じています。この感情を抱え“若いなり”の努力をしますが、若いのが故に保護者といっても母親だけとかかわったり、児童だけに目を向け保護者に意識が向かないという視野の狭さが目立っています。しかし、中堅以降になると視野は広がり、かかわる対象に父親が加わったりします。さらに、熟年期に入ると、努力を重ねても保護者がどうやっても理解してくれない状態を経験しますが、身に付いた視野の広がりや事態を打開していきます。そして、保護者を意識しないと教育活動はできないと認識するようになります。

なお、保護者対応の難しさに関与するのが教師の年齢という個人的特性と、教師が家庭をもつという社会的特性でした。これらは、保護者と教師の関係にブレーキをかけていきます。若い頃は年上の保護者に“遠慮して言えない”という経験をもち、教師の家庭生活が関係にブレーキをかける場合もありました。逆に、保護者と教師の関係を促進する教師の個人的特性と社会的特性がありました。それが、若さや、年齢を重ねることで保護者に助けってもらったり、保護者にものを言

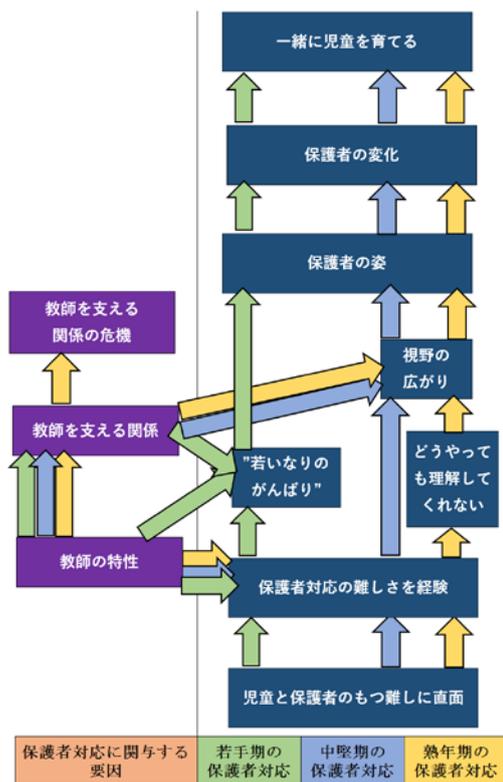


図3 保護者対応の変容プロセス

いやすくなることです。さらに、我が子をもつという教師のライフイベントは、親となり保護者の気持ちを理解することで、関係を促進する要因となっています。

また、教師を支える関係には保護者に支えられると、教師コミュニティにおける世代継承がありました。前者では、教師は若い時に、保護者たちに励ましてもらうこと、そして保護者に気づかされるという学びを得ています。また、後者では教師同士で支え合っていました。若い頃は先輩教師がアドバイスしてくれる経験を持ち、歳を重ねると他の教師と保護者をつなぐ役割をとるようになります。また、管理職等になり学校での役割が変わっていくことで、同僚教師と保護者をつなぐ役を担うようになります。この教師を支える関係が、“若いなり”のがんばりと中堅期以降の視野の広がりを下支えしたと解釈できました。

このように、若い教師に保護者は情緒的サポート、つまり安心や尊敬等を提供し、問題解決の手助けという情動的サポートも提供していたことがわかりました。そして、先輩教師が若い教師に提供するのが情動的サポートと道具的サポートでした。道具的サポートは個人に与えられる特定のモノやサービスとされ、若い教師にとり先輩教師が保護者面談に同席することは道具的サポートであり、一人ではないという安心感をもつ情緒的サポートにもなります。このように学校コミュニティでは情緒的サポート、そして情動的サポートや道具的サポートが提供されてい

たことがわかりました。

(3) 異世代教師たちの自主的自発的な学び (generativity、世代継承) を支援するワークショップ型研修のデザイン、試行：

(1) と (2) の研究成果から、熟年教師は若い頃に先輩教師に支えられ保護者対応の能力を高めていることがわかりました。しかし現在、教師コミュニティでは年齢構成のアンバランスが起こり、先輩教師が若手を支援する世代継承が危機的状況にあります。そこで、インタビュー調査による知見を基に「保護者対応の経験交流を目的としたワークショップ」を開催することで、先輩教師から若手教師への支援を行うことにしました。成人のナラティブ学習研究の Rossiter, M. and Clark, M. (2010) と大学教育における参加型授業を实践する中野 (2017) から、ワークショップ型研修の構想を得ました。

ワークショップの概要

ねらい

- ① 異世代の教師がもつ保護者対応における実践的課題について理解を深めること
- ② 異世代の教師たちの保護者対応における経験についてグループで交流すること
- ③ これからの保護者とのかかわりについて展望をもてるようにすること

ワークショップの流れ

- ① ワークショップの趣旨説明、グループづくり (異世代の教師4名で1グループ)
- ② 自己紹介 (グループ活動)
- ③ 保護者とのかかわりふりかえりシート記入 (個人作業)
- ④ 経験交流 (グループ活動)
- ⑤ 経験交流のふりかえり (個人作業)
- ⑥ わちあひ (グループ活動)、グループからの報告

ワークショップ後のアンケート結果は、6点満点のところ、異世代教師の保護者対応における課題を理解できたか「5.7点」、保護者対応の経験交流をできたか「5.9点」、今後の保護者対応について展望をもてたか「5.7点」でした。また、「とても楽しかったです。知らない人、異世代の人と前向きに、同じテーマで話せてよかったです。」「先輩方から、対応のヒントや方法をたくさん聞かせていただけて勉強になりました!」「他の方の経験を聞くことは大きな学びとなる。」との感想を得ています。

このように、ワークショップが教師たちにとって情緒的サポート、情動的サポートを得る活動内容になっていたことがわかりました。

(4) 今後の課題

① 小学校教師の保護者対応における変容プロセスを公示し、保護者対応の交流サイトを立ち上げたいと考えます。M-GTAの結果図と概念、ヴァリエーションには教師たちが先輩から受け継ぎ後輩に伝えたいことが理

め込まれています。これをオンラインにより公開することで、研究協力者 22 名のローカルな知をグローバル化し、異世代教師の交流、世代継承を図り、熟年教師たちの『わざ』を広く教師コミュニティで継承していくことが可能になると考えます。

② 教師たちの世代継承、学びを支えるために、保護者対応のワークショップ型研修のパッケージ化を進めていきます。

③ そして、①と②の学びを組み合わせ、多忙な教師たちに効率的かつ質の高い学びを提供していきたいと考えます。

なお、「4. 研究成果」(1) ①については〔雑誌論文〕①～③を、(1) ②については〔図書〕①を、(2) については〔学会発表〕①と②を参照ください。

<引用文献>

- ① 秋田 喜代美、教師教育から教師の学習過程研究への転回、ミクロ教育実践研究への変貌、矢野 智司・今井 康雄・秋田 喜代美・佐藤 学・広田 照幸編、世織書房、変貌する教育学、2009
- ② Aspinwall, K. "Teacher Biography: the In-service Potential," *Cambridge Journal of Education*, Vol. 16, 1986, pp. 210-215.
- ③ 藤澤 伸介、風間書房、「反省的实践家」としての教師の学習指導力の形成過程、2004
- ④ 木原 俊行、日本文教出版、授業研究と教師の成長、2004
- ⑤ 木下 康仁、弘文堂、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践、2003
- ⑥ 中野 民夫、岩波書店、学び合う場のつくり方、本当の学びへのファシリテーション、2017
- ⑦ Rossiter, M. and Clark, M.(Ed.) *Narrative Perspectives on Adult Education: New Directions for Adult and Continuing Education.* Willey Periodicals, Inc., A Wily Company, 2010 (立田 慶裕・岩崎 久美子・金藤 ふゆ子・佐藤 智子・萩野 亮吾訳、福村出版、成人のナラティブ学習、人生の可能性を開くアプローチ、2012)
- ⑧ Spenser, L.M. and Spencer, S.M. *Competence at work*, John Wiley & Sons, 1993(梅津 祐良他訳、生産性出版、コンピテンシー・マネジメントの展開・導入・構築・活用、2001)
- ⑨ 上村 恵津子・石隈 利紀、保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して、教育心理学研究、55 巻、2007、560-572

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

- ① 植木 克美、「印象に残った保護者」とのかかわりにおける小学校教師の成長と世代継承、熟年教師と若手教師の事例比較、教育情報学研究、査読有、16 巻、2017、21 - 34
- ② 植木 克美、鎌田 良子、小学校養護教諭がふりかえる保護者対応の変容過程、北海道教育大学紀要(教育科学編)、査読無、67 巻 2 号、2017、307 - 316
<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8208>
- ③ 植木 克美、熟年期教師のふりかえりから捉える保護者対応の変容過程、日本教育工学会論文誌、査読有、39 巻 (suppl.)、2015、41 - 44
DOI:<https://doi.org/10.15077/jjet.S39032>

〔学会発表〕(計 14 件)

- ① 植木 克美、経験豊かな熟年教師の「わざ」を若手に伝える、日本コミュニケーションとテクノロジー研究会、2018
- ② 植木 克美、渡部 信一、川端 愛子、後藤 守、小学校教師の保護者対応における変容プロセスと世代継承、日本教育工学会研究会 JSET17-5、2017
- ③ 植木 克美、川端 愛子、後藤 守、保護者対応における若手教師の成長と世代継承、日本教育工学会第 31 回全国大会、2015

〔図書〕(計 1 件)

- ① 植木 克美、ナカニシヤ出版、第 1 章 熟年教師が語る「見えない能力」の教育と評価、渡部信一編著、教育現場の「コンピテンシー評価」、「見えない能力」の評価を考える、2017、3-30

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植木 克美 (UEKI, Katsumi)
北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70292068